



開会挨拶をする奥山和徳支部長

2016 年度 土を考える会冬期研修会 北海道 十勝支部

▶2月4日、5日
(北海道音更町)

豆だ・ビートだ・増収だ！

2月4日、5日に北海道音更町にて、北海道土を考える会十勝支部冬期研修会が開催された。十勝の輪作に欠かせない豆とビートにスポットを当て、講師の方々からの情報提供の後、参加者33名でさまざまな意見交換が行なわれた。

冒頭に、十勝支部・支部長の奥山和徳氏が開会挨拶をし、総合司会は副支部長の佐藤博志氏が務めた。

初めの情報提供は、「てん菜栽培の省力化、直播栽培と簡易耕について」、十勝農業試験場生産システムグループの加藤弘樹氏が講演した。実例を交えたわかりやすい解説のなかで、プラウ耕と簡易耕における地温データの変化が示され、初期生育が大事なビートの直播にはプラウ耕は欠かせないと述べた。

続いて同試験場研究部豆類グループの小林聡氏が「大豆品種の特性と最近の研究成果について」話した。長年、麦の品種改良にかかわってきた経歴に触れ、デビュー以来ずっと不作続きだった「きたほなみ」が昨年の大豊作となり、やっと胸を張って自分が開発したと言えるようになったと述べ、会場の笑いを誘った。恒例となった参加者に質問を投げかけ、○×の札で意思表示してもら

うだけでなく、参加者からの質問も多く、情報交換は盛り上がった。

続く、第三部は「畑作の匠」吉本博之氏に聞く増収の技と題し、初めに吉本氏のヒューマンドキュメンタリーを上映。その後、2012年の現地研修会で作成した「吉本農場に学ぶ深耕の意義」の資料をもとに吉本氏の話を聞いた。時間をかけて理想とする土づくりを求めて作土を15cmから40cm、45cmにするために、堆肥の投入、休閑緑肥をスタートし、緑肥作物の選択に思案した。それぞれの場面で、土づくりにかける吉本氏の哲学を学んだ。

その後の情報交換会の場でも、引き続き吉本氏から増収の技を聞き出し、そうと参加者から質問が飛び出した。吉本氏からは過去に2回も小豆を廃耕にした失敗談まで聞き出すことができ、充実した情報交換会となった。



会場からの質問に丁寧に応える吉本博之氏



研修会に参集した十勝エリアの精鋭たちの集合写真



恒例となった○×の札で、参加者と講演者の距離が近くなった

北海道 道東支部



JAの取り組みと土を考える会の
宴選を話した小野寺俊幸氏



若手を代表して壇上に上がった
竹原宏太郎氏



開会挨拶は細川幹生支部長

▶2月8日、9日
(北海道美幌町)

AGRI WARS オホーツクの覚醒

2月8日、9日に北海道美幌町で道東支部の冬期研修会が開催された。消費地から遠く、生産だけに目が向きがちな地域事情を逆手に取り、オホーツク農業の魅力を再度見つめようというのが今回のテーマである。オホーツクエリアの会員と講師陣ら約30人が参集した。初日は、細川幹生支部長の挨拶により開会し、谷智博氏が進行役を務めた。

初日の話題提供は2つ。オホーツク農協青年部協議会の竹原宏太郎氏(津別町)がオホーツク産小麦の地産地消の取り組みを紹介した。続く



試食をしながら進めたグループディスカッションも盛り込まれた



て、JAとくろ・代表理事組合長の小野寺俊幸氏が登壇。2兆円というホクレンの巨大な事業規模を紹介し、農協改革やTPPの話題を交えて、オホーツク農業が進むべき方向性を示した。最後に常呂町の研修制度を紹介し、ますます若手や女性の活躍を期待したいと述べた。

3つ目のテーマは「オホーツクにあるモノとないコト」。まず、米シスト庄内の佐藤彰一氏(山形県庄内市)が米粉100%のかりんとう「百米」の誕生までのエピソードを紹介。続いて、「百米」と「有興農社の春名正義氏(上富良野町)の「KAMIFLAG」ブランドの小麦加工品を前に4つのグループに分かれて、ディスカッションが行なわれた。

参加者の年齢層は幅広く、その後の情報交換会でも品目拡大や新しい技術の導入など幅広い話題で交流が図られた。

翌2日目の演目は、「作物を魅力的な商品へ」と題したパネルディスカッション。佐藤彰一氏、春名正義氏に加えて、(有)天心農場の北川和也氏(中富良野町)をパネラーに迎え、加藤祐子(株)農業技術通信社)が進行した。農産物加工に挑戦する参加者が少ないなか、参加者らは業界内やその他の企業との取引における失敗談などに共感を得た様子だった。



参加者らの集合写真



2日目のパネルディスカッションの様子